令和 4年度　園評価書

園番号 28　　園名 富士見台こども園

Ⅰ 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	評価	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かにいっぱい遊ぶ子	やってみたいがいっぱい	子ども達はやってみたい、明日もやりたいと思える遊びに出会い、意欲的に遊びを楽しんでいる	・子どもたちは「今日はこれを使って〇〇したい！」と段ボールや空き箱などの材料を家庭から持ってきて、意欲的に遊び出そうとする姿もみられている ・「〇〇やりたい！」「これとっておきたい！」と遊びを明日に続けようとする姿が見られている	A	A	・子どもたちの思いに寄り添うだけでなく先を見通して「やってみたい」環境を全職員で整えている成果であると思われる	・継続的に環境を整えられるよう環境作り再構成の日を決めて、全職員で取り組めるようにする。そこからの日々は、微調整で済むと思われるので、行っていきたい ・大人が主体的にならず、子どもが主体的に保育をすすめられるよう子どもが選んだり試したりできる環境を作る（人的・物的）
		子ども達は様々な体験の中で考え、試し、工夫して遊んでいる	・秋の自然物（どんぐり・落ち葉・まつぼっくり）を使ったままごとコーナーなど、季節に合わせて、遊びの環境を再構成している ・ホース、バスマット、プラスチック段ボール、タイヤなど園庭で可動式遊具をいろいろなイメージに見立てて遊んでいる	A	A	・遊びの活動範囲が広がっていることは、全職員が子どもたちの思いや活動を受け止めている成果であると思われる。安全第一で継続していただきたい	・子どもがとっておいて、また使いたくなるようなスペースを作れるようにしていきたい ・子どもたちの遊びはじめと遊び終わりを大切にできる遊び環境の構成の仕方を研究する ・新しい遊びや遊具用具玩具が出てきた時のルールの確認・共通理解を行う
		子ども達は自分の思いを伝えたり、友だちの思いに気付いたり、認めたりしながら関わり合うことを喜んでいる	・大好きな友だち、同じクラスの友だちという意識をもち、「友だちと一緒にいたい」「〇〇ちゃんと遊びたい」という気もちが強くなってきた。 ・幼児はもちろん乳児であっても、困っている友だちがいたら、「どうしたの？」とたずねたり、近くの先生に友だちの様子を伝えようとしたりする姿が見られる	B	A	・日常の遊びの中で友だちと関わる時間がコミュニケーション力を学ぶ機会となっている。また、そのかかわりを先生方が見取っていることすばらしい	

Ⅱ 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの呟き、表情、視線等の意味を探り、一人ひとりの思いに共感や肯定する声掛けをする	・子どもの表情・表現を大切にしながら、保育教諭が応答するようにする ・一人ひとりの思いを大切にした声かけをしている ・否定的なワードを使用しない子どもへの声かけとなるよう工夫している	A	A	・富士見台こども園に、子どもたちを「とらえ」「ねがう」「かかわる」のサイクルが定着していることが、子どもたちの遊ぶ姿や表情に表れている。また、先生方が「遊び」や遊びの変容課程をも子どもたちと共有して、共に喜び合う姿があることがすばらしい。 ・講師を招聘するなど前向きに研修を進める姿勢が、先生方の力量を高めている。それは、すべての子どもたちに還元されるので、今後も引き続き研修を深めていくことを期待します。	・子どもの見取りを丁寧に行い、職員で共有することでより意識ができる ・「待っていて」という言葉を使わず、どうしてもすぐに対応できない時には、「〇〇してからでいい？」と子どもに聞くようにする
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	子ども達の生活リズムの違いを把握し、早番から遅番まで安心して過ごせるよう適宜、見直し改善を行う	・休み明けや週末には特に、体調の変化に配慮しつつ無理なく過ごせるようにしている ・クラス保育の時間が増えている中で、静と動の活動を工夫し、その中でも安心して過ごせるように対応している ・早番・遅番保育の遊びの見直しに取り組むことができなかった	B	B		・分掌として、早遅番の環境を整えるリーダーを決めたらよいのでは ・遅番に引き渡す際に、共通理解を図ることで、職員間の伝達漏れをなくす ・クラス担任は、頼んだだけでなく、その後どうなったかを確認する
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの発見、疑問、喜びの出会いがやってみたい気持ちにつながる環境作りをしている	・園庭で見つけた虫で遊ぶ子どもたちに図鑑を何冊か出しておくと自分で探して読む姿がみられた ・講師を招き、保育環境を見直す研修を行ったことで、保育教諭の少しの ‘しかけ ‘の大切さを学んだ。自身の室内環境の設定も意識して行うようになった	A	A		・初めてのことなど「やってみたい」のきっかけ作りが必要な子もいるので、その子への援助の仕方を考えていく ・子どもの発見についてその様子を言語化したり、認めていたりしたが、さらに発展できる言葉かけを考えていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	日々の小さな怪我とヒヤリとした場面を打合せで報告。原因と改善を職員間で周知する	・園内でヒヤリとしたことや他園の事例を全職員で共通理解した。いつでも自分事と捉え、すぐに改善策を考え、実施することを心がけた ・毎日の打ち合わせの時間を利用し、ちょっとしたケガや危なかった事例を把握しあっている	A	A	・避難経路への物品配置には注意	・職員間でもっともっとコミュニケーション（言葉かけ）をたくさん取るように心がける ・事実の共有だけでなく、原因及び防止策についても検討する
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	基本的生活習慣が身に付くよう、家庭と連携し個々に応じた指導の積み重ねを行う	・給食おいしかったよ！という子どもたちの言葉に改めて、安全な給食を提供できるようにしている ・手洗いの習慣の徹底と手拭きペーパーを使っての手の拭き方を継続して丁寧に伝えている	B	A		・どんなことも他人事として扱わず、自分だったら、と自分事として捉える意識を持つ ・エコ、物を大切にするはSDGSにもつながる。子どもたちと一緒に考えていきたい
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	月１支援児会議を行い、計画的に支援児活動を進める。また、個々の発達、特性を職員間で共有し支援に活かす	・支援児を年齢別の2グループに分けて、少人数での活動にしたことで、待ち時間を少なくし、個々に対応する時間の確保を進めた ・支援児会議で互いの悩みを相談したり、どのような手だてが有効かを多面的に話し合える時間をもっと確保したい	B	A	・子ども一人ひとりが感じている「困り間」に寄り添い、少しでも軽減できるように適切な支援を検討実施できていることは大変すばらしい。より良い支援の追求を継続していくことを期待します ・全職員が子どもたちの「やってみたい」を大切にしていることが保護者へ伝わり、たくさんのあたたかな協力につながっていると思われる。先生方の積み重ねが協力という形になってかえってきている ・「遊びやすさ」と「片付け」を楽しみながらできるようにするアイデアを構想するところがすばらしい ・保護者参観の仕方も工夫があり、輝く姿を保護者へ伝えようとする努力とアイデアがすばらしい ・子どもの思いをつなぎ、一つの遊び（学び）（学校では単元構想）としてストーリーに仕上げて実践する構想力・アイデアがすばらしい	・全員を一度に把握することは難しいので、ケース検討会を実施することで支援のバリエーションも増えてくるのではないか ・クラス会議も並行して行い、担任全員が同じ方向性で支援できるようにしたい
5 組織運営	(1)組織体制の充実	園務分掌を中心に見通しをもって企画、発信を行い、職員間で協力し合いながら、園運営を進める	・分掌リーダー中心に計画実行することができたが、もっと早めに見通しをもって計画実行できた方がよかった ・分掌メンバーで確認できていてもクラスへの周知ができていないことがあった。最終の確認を2重3重に声をかけて行う	B	B		・専門性を高めたやってみたいにつなげるには、話し合いをもっと重ねられるとよい ・個人まかせにならないように役割分担をして取り組んでもらえるように協力を得る
6 研　修	(1)研修体制の充実	職員が自分の「やってみたい」を日誌に記載し、職員も子ども達とやってみたい意識を高める	・子ども達の「やってみたい」を見守り支えることの大切を実感し、保育するようになった ・「やってみたい」を意識して保育する習慣がついてきた。子ども一人ひとりのやってみたいに応じる環境や準備が難しい時もあった。やってみたいが継続できるような環境やかかわりが大切である	A	A		・やってみたいが続くような環境やかかわりが必要 ・やってみたいを実施した後の振り返りも行っていきたい
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	安全に遊べる乳児園庭と幼児は自ら遊具、玩具、用具を選び遊び出せる環境整備。片づけやすい工夫	・ハーブを植えたり、秋野菜を育てたりして遊びの中に自然物を取り入れていくことができた ・2歳児園庭（あそび広場）は、安全に遊びつつ、幼児と自然な交流が見られとてもよい環境となった。さらに季節に合わせて再構成していきたい ・可動式遊具（タイヤやマット）が増えたことで子どもの遊びが広がった	B	A		・他のクラスが今どんな遊びをしていて、何を楽しんでいるのかを知り、園庭の環境をその都度変えていきたい ・少しずつ他学年との交流を行ったり、一緒に遊ぶ中で刺激を受け合ったりしていきたい ・片付けも楽しんで自分でできる可視化された環境作りを行う ・大人も子どもも片付けたくなる環境作り
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	参加会を実施し教育・保育を知ってもらい、遊びを可視化して家庭へ遊びがつながる発信をする	・親子で遊ぼう会（2歳児）は、たくさんの親子が参加し、親子だけでなく保護者同士もよいコミュニケーションの機会になった ・コロナ禍でも実施できる行事の工夫をし、親子遠足を2学年実施した。また、保育参観・参加できる機会も全学年行うことができた ・玄関前が以前より充実している	A	A		・引き続き、玄関スペースの有効活用を考えていく ・保育教諭間、保護者と保育教諭間の風通しをよくし、お互い声が出せるように環境も作っていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	10の姿を捉えたドキュメンテーションの発信や見通しをもって計画をたて交流できる機会を作る	・乳児参加会のスライドや定期的に作成しているドキュメンテーションにおいては、10の姿を意識して作成した ・近隣の小学校4校の公開授業の参観を行った。中堅研では、小学校の先生と話し合いの場を持つこともできた。また、自園の年長児の公開保育には、3校の小学校から参観してもらえた	A	A		・10の姿を日常の連絡ボードの取り入れる意識をもつ ・年間計画の作成など、学校や他園と計画的に交流ができるように見通しをもって相談を持ち掛ける
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	近隣園との交流や地域の様々な人との交流、情報交換を行う。地域にある公園、広場を園活動に活かす	・近隣園とは、公園などで出会った時の対応の方法を全職員で周知した。 ・おしゃべりサロンでは、講師を招いたふれあい遊びの会とクリスマス会の時には、20名以上の参加があった ・地域の方と出会った時、園に来客・見学者がいる時には、積極的に挨拶を心がけているが、もう1歩踏み込んだ活動も行っていきたい	B	B		・避難訓練や集団での清掃活動等にこども園も積極的に参加し、地域の一員としての活動を行っていく ・散歩時などでの積極的にあいさつをすることで、近隣園とも近所の方ともかかわっていく